

フィリピン滞在記 ⑬---大統領選挙とその後

為我井輝忠

3月下旬に日本に一時帰国した。フィリピンの大学では3月中旬に最終試験が行われ、その後は6月初旬まで約2か月半夏休みとなる。長期の休みなので、日本に帰国して5月中旬まで日本にすることにした。帰国寸前にはあちこちで大統領選挙が過熱していて、ニュースで見ていると、殺傷事件まで起きたようであった。帰国して1か月半ほどの後、気になる大統領選挙が5月9日にあり、翌日にはその結果が判明した。

新大統領に選ばれたのは「フィリピンのトランプ氏」と言われたロドリゴ・ドゥテルテ氏(71)で、当初はあまりぱっとしなかったが、後半徐々に追い上げてきて、終盤ではトップに躍り出たとの予想であった。

前回の「フィリピン滞在記」では、大統領候補には5人立候補していると書いたが、その5人について再度確認をしておきたい。大統領に選ばれたのは南部ミンダナオ島のダバオ市長をしていたロドリゴ・ドゥテルテ氏で、約1457万票を得、全体の40%を獲得したと選挙委員会が発表した。現大統領のアキノ氏が後継指名したマヌエル・ロハス前内務・自治相(58)は23%、無所属のグレイス・ポー氏(47)は22

%にとどまり、両氏ともすでに敗北を認めた。もう一人の候補者で現副大統領のジェジョマール・ピナイ氏(73)とミリアム・サンチャゴ氏(69)に関しては、日本の新聞ではどこも詳しいことが出ておらず、詳細は分からない。数日後の「フィリピンのネット情報でそれぞれの得票数が出ていたので、ご参照ください。

ロハス氏は10日午後の記者会見で「ドゥテルテ氏の成功を祈る」とだけ述べ、数分で会場を後にした。アキノ氏は自らの後継継続に失敗し、沈黙を守っている。

2010年に発足したアキノ政権は、6月末で

任期を終えるが、国内外からの評価は高かった。外交・安全保障面では日本とは安定した関係を結び、米国とは米軍を25年振りに事実上再駐留させる新軍事協定を締結し、日本とも地位協定を結ぶ方向に至った。南シナ海の領有権を争う中国との関係は悪化したものの、国民の支持を集めてきた。

経済面では汚職撲滅と財政再建を強く推し進めてきた。

国債は13年に大手格付け会社から「投資適格」と認定され、外国からの投資が増えた。在任中の国内総生産(GDP)の伸び率は年平均で6%を超えた。世界銀行によると、14年



各候補の得票数

の対内直接投資額は62億ドル(約6700億円)と就任した時の6倍に増えた。

そうしたアキノの路線から民意を振り向かせたドゥテルテ氏は、「犯罪者は殺害する」といった過激な発言で人気を集めたものの、外交や安保、経済政策について語る場面は少なかった。

「祖父が中国人だから中国と戦争しない」と述べ、中国との対話の重要性や南シナ海での共同資源探査へ可能性を示唆するなど、一見すると中国寄りの姿勢が注目される。一方では、「(中国と領有権を争う) スカボロー環礁に行って国旗を立てる」とも述べている。「南シナ海問題は多国間で協議する」との彼の見解は、あくまで二国間問題として米国などの介入を排除しようとする中国とは相容れない。融和か強行か、現時点では対中姿勢は見えにくい。数日前対中国政策の方針を発表したようだが、詳細は未確認である。

経済政策は外資規制の緩和を示唆した程度で、アキノ氏が参加に前向きであった環太平洋経済連携協定(TPP) に関しては何の言及もない。

ドゥテルテ氏は世界には目もくれず、既存の政治システムを否定した。国民が期待する



銃を手にしたドゥテルテ新大統領

英雄像を演じる姿は、米大統領戦で共和党の指名が確実になったドナルド・トランプ氏を大いに彷彿させる。改革を語るドゥテルテ氏は国民を熱くさせた。しかし、世界の現実と常識を直視し、米国や中国をはじめ諸外国と冷静な関係を築けなければ、フィリピン国民の熱狂

はやがて失望へ変わるだろう。

副大統領選はかなり接戦であった。副大統領は、大統領が何らかの理由で失脚した場合などに大統領に繰り上がる重要なポストである。その副大統領選で、故マルコス元大統領の長男フェルナンド・ボンボン・マルコス上院議員(58) が当初優勢だと言われていた。確かに開票が始まると、その勢いはすさまじいものがあった。ところが、後半になるとアキノ現大統領が推すレニー・カブレッド・ポッチェロ氏(52) が抜きん出てきて、当選を決めた。これまた今後の展開が興味あるところである。

こうしてフィリピンの熱い選挙の戦いは終わった。日本から見ていると、選挙の方法も手段も異なるが、フィリピン国民がどうしても選挙に熱狂するのかわかりにくい。ただ、人々の不満やはけ口がこうした選挙を通して国に向けられているのかもしれない。